



ラオス・ヴァンヴィエンにおけるバックパッカー・ エリアの空間構成とその特性

森, 聖太
平山, 洋介

(Citation)

日本建築学会計画系論文集, 72(619):77-83

(Issue Date)

2007-09

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004679>



ラオス・ヴァンヴィエンにおけるバックパッカー・エリアの 空間構成とその特性

CHANGES IN THE SOCIO-SPATIAL FEATURES OF BACKPACKER AREA IN VANG VIENG, LAOS

森 聖太*, 平山 洋介**
Seita MORI and Yosuke HIRAYAMA

This paper explores socio-spatial changes in a backpacker area in Vang Vieng, Laos. In this rural town, homogenous built environment forms a tourist area where the “indigenous characteristics of underdeveloped rural town” remain and are prominent. The paucity of tourist development is one of the special attractions of the town for international backpackers. However, local people are pursuing vigorously further evolution of the town as a tourist place, and therefore, transformation in the socio-spatial structures of the area has been proceeding at a remarkable pace. In that sense, locality of rural town which has attracted foreign tourists is very fragile.

Keywords: *backpacker area, Laos, tourism, globalization, rural development*

バックパッカー・エリア, ラオス, 観光, グローバリゼーション, 農村開発

1. 研究の目的と方法

本稿は、ラオス・ヴァンヴィエンの町に形成されている「バックパッカー・エリア」の空間構成とその特性を明らかにし、観光がグローバルに拡大する今日の農村開発のあり方を考察するものである。

観光の世界的な拡大のもと、各地で観光振興のための開発が進んでいる。特に他産業の成長が見込めない国や地域では、観光は経済振興のひとつの手段として重要である。しかし同時に、途上国の農村や小都市の観光開発では、大規模開発にともなう環境破壊、先進国や都市部の企業への利益集中などの問題が生じやすい¹⁾。国際観光のグローバル化のもとでの開発を、その土地のローカルな経済・社会・文化的な文脈を尊重したうえでどのように計画・実行していくのかは依然として重要な課題である。

観光のグローバルな拡大の影響を受けて出現したエリアの典型のひとつが「バックパッカー・エリア」である。ここでは、バックパッカー・エリアを、外国人バックパッカーが多く集まり、彼らが主に利用する、低料金の宿泊施設が密集したエリアと定義している。バックパッカーの主な特徴は、パッケージ・ツアーの利用者を初めとする多くの観光客に比べ、旅程を自ら決定し、低い予算で長期にわたって旅行をすることである。バックパッカーは低廉な客室の需要を増加させ、バックパッカー・エリアの形成を促進してきた。

バックパッカーは、一人一日当たりの消費額が小さいこと、ヒッピーに代表されるように社会的逸脱者としてのイメージが強いことなどから、国や地域の観光振興の取り組みにおいて主要な誘致対象として取り上げられず、あるいは意図的に排除されてきた²⁾。しかし、国際観光が拡大する今日、バックパッカー・ツーリズムに着目する必要性が高まっている。第一に、バックパッキング旅行は近年著しく拡大してきた³⁾。バックパッカー・エリアが各地の都市あるいは農村に出現し、それぞれの場所の社会・経済・空間に与える影響が増大している。第二に、バックパッカーを主な顧客とする観光振興は、特に途上国における経済発展のひとつのあり方となる可能性をもつ。彼らを対象とした商売は大規模な初期投資を必要とせず、資金力の低い地元民にも開始が比較的容易であること、収入が地元民に直接・比較的広範囲に分配されることなどが指摘されている⁴⁾。

バックパッキング旅行の普及にあわせて、1990年代後半から、バックパッカーに関する研究が欧米の研究者を中心に活発化してきた。これらの研究の多くは、バックパッカーという旅行者の特性の把握に主眼を据えたものである⁵⁾。その他に、バックパッカー・ツーリズムが途上国の社会・経済に与える影響を検討する若干の取り組みが見受けられる⁶⁾。しかし、グローバルに拡大するツーリズムの影響を受けた場所としての観点からバックパッカー・エリアを捉え、

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科 博士後期課程

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授・学博

Graduate Student, Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University
Prof., Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Ph. D.

その空間構成を調べた試みは見当たらない。

そこで、筆者はこれまでに、バンコク・カオサンエリアのバックパッカー・エリアにおいて調査を行い、その空間が多様な構成要素を受け入れる柔軟性を有していることを指摘してきた⁷⁾。これに続き、本稿では、ラオス・ヴァンヴィエンのケーススタディの結果を分析する。バックパッカー・エリアが形成される条件は、立地・形成時期等の指標ごとに異なると考えられる。カオサンエリアは大都市に立地し、1970年代から安い宿の開業が始まったバックパッカー・エリアであった。これに対し、ヴァンヴィエンは農村に立地し、1990年代終盤に拡大した、いわば「農村・新興バックパッカー・エリア」である。本研究は、農村・新興のバックパッカー・エリアの空間構成を明らかにすることを目的に、その典型のひとつとしてのヴァンヴィエンにおいてケーススタディを実施している。農村・新興バックパッカー・エリアは、グローバルに拡大する観光の最前線のひとつと考えられる。バックパッカーは有名観光地だけではなく、アクセスの悪い農村など、観光地として「未開」の場所への訪問に価値を置き、その地に観光開発の先鞭をつける「目的地の開拓者」としての役割をもち⁸⁾、各地の農村にグローバリゼーションの影響をもたらす媒体となっている。観光の拡大のもと、観光とは無縁であった農村にバックパッカーの訪問を受けて生成した空間がどのような特性をもつのかを詳細に観察し、その意味を考察することは、世界各地において観光の重要性のさらなる増大が確実視される今後の農村開発のあり方を考える上で重要である。

ヴァンヴィエンは、ラオス人民民主共和国中北部のヴィエンチャン県ヴァンヴィエン郡に属し、首都ヴィエンチャン特別市から約160km北方に位置する町である。主要産業は農業であるが、近年では観光産業の伸びが著しい⁹⁾。当地にバックパッカー・エリアが形成されたのは1990年代後半である。ラオスにおける外国人の個人旅行は1994年まで禁止されていた。同国では道路等のインフラ整備が遅れているため、団体旅行客の訪問は空港をもつ主要都市に集中する傾向がある¹⁰⁾。1994年以降、国内各地を陸路移動し、ヴァンヴィエンなどのアクセスが陸路に限定された土地を訪問した外国人の多くはバックパッカーに代表される個人旅行者であった。現地に旅行者が訪れるようになった要因として、首都ヴィエンチャンと、伝統的な街並みが残る北部の都市ルアンプラバンという、旅行者の訪問が多い二都市を結ぶ国道13号線のほぼ中間地点に位置し、自動車でも9時間前後を要する両都市間の移動途中の休憩地として適当な立地であること、山岳や河川の美しい自然景観をもつことなどがあげられる¹¹⁾。ヴァンヴィエン郡を訪れた外国人数は1997年には4500人、国全体の旅行者数の1.0%にすぎなかったが、3年後の2000年には2万8000人、2005年には8万2000人、国全体の旅行者数の7.5%に増えた¹²⁾。ヴィエンチャン県における宿泊施設の客室総数は1997年の157から2001年の899へ激増し、この増加分の大半がヴァンヴィエン中心部に新設されたものである¹³⁾。さらには、飲食店、インターネットカフェ、アウトドア活動のツアーを催行するツアーオフィスなどの開業が相次ぎ、バックパッカー・エリアを拡大してきた。

以下では、現地でのフィールドワークの結果をもとに考察を進めていく。調査は、①建築物と商業活動の内容・分布、②宿泊施設所有者の特性、③外国人バックパッカーの特性、の3点の把握を目的としている。空間は建物や地形などの物理的要素のみでつくられる

のではなく、現地の社会との関わりの中で形成されていく。上記3点の調査はそれぞれ別個の主題を扱ってはいるが、その全てがヴァンヴィエンの空間を構成する要素として考察される。また、本稿の結論では、これらの分析結果を、バンコク・カオサンエリアでの調査から得られた知見との比較を通じて考察している。個別の調査手法は各項に詳述した。

2. ヴァンヴィエンの建築物と商業活動

この章では、ヴァンヴィエンのバックパッカー・エリアの物理的な空間を作り出している建築物と、その建物において展開されている商業活動の特性を観察する。2002年6月、2003年9月、2005年12月、2006年10月の4回、建築物の構造（木造／非木造／木・非木混合造¹⁴⁾）と階数¹⁵⁾、店舗・サービス施設の種類の分布を目視調査した。調査対象は、宿泊施設やレストランなどの商業施設が高密に立地するエリア、すなわち東西を旧国道13号線とソン川に、南北を病院南側の道路と市場跡地北側の未舗装道に囲まれたエリアに建つ建物、及びこれらの道路・街路に面した建物である。

2006年10月時点の建築物と商業施設の分布を地図上に示したものが図1である。調査区域北西部の市場跡地周辺から旧国道13号線沿いには、建築物および店舗・サービスが特に高密に立地している。

調査対象となった建物の棟数は529であった。階数別の内訳をみると、現地の建物は総じて低層であることがわかる。1階建てが346棟と全体の約3分の2を占め、2階建て以下の建築が全体の95.8%に及ぶ。3階建て以上の建築は少ない。構造別の内訳は木造が29.3%、非木造が50.9%、木・非木混合造（以下混合造）が19.8%となっており、非木造が過半を占めてはいるが、3種類の構造をもつ建物が混在している。階数・構造別にみると、1階建てでは木造43.1%、非木造55.5%、混合造1.4%、2階建てでは木造、非木造、混合造がそれぞれ3.7%、34.1%、62.1%、3～5階建ては全て非木造であった。さらに、個々の建物の建築面積を観察してみると、図1からわかるように、比較的大規模な建築面積をもつのは、病院、学校、役所等の公共建築と一部のホテルのみであり、それらを除く大半の建築物は概して小規模である。現地のバックパッカー・エリアにおける物理的空間特性のひとつとして、低層かつ建築面積が小さい、小規模な建築から構成されているということが指摘される。

次に、現地の商業活動についてみる。調査エリアには多数の店舗・サービスが分布している。業種別にその数をカウントすると、多い順に、飲食店73件、雑貨・食料品店¹⁶⁾51件、宿泊施設36件、トレッキングやカヤッキングなどのツアー、バスチケットなどを取り扱うツアーオフィス30件、貸自転車・バイク店25件、ランドリーサービス24件、マッサージ店11件、インターネットサービス9件、民芸品店7件となっている。宿泊施設や飲食店が貸自転車・バイク店、雑貨・食料品店などを併設するケースも多くみられる。調査区域にはそのほかに、建材店、自転車・バイク修理工場などの事業所が点在しているが、その数は多くなく、生鮮食料品、電化製品、日用品など、主に地元民が利用すると想定される店舗はヴァンヴィエン中心部から約2km離れた市場に集中しており、当該エリア内ではほぼ皆無である。調査区域に立地する店舗・サービスは旅行者を主な顧客とした業種で構成されている。

こうした建物とそこで展開される商業活動の間にはどのような関

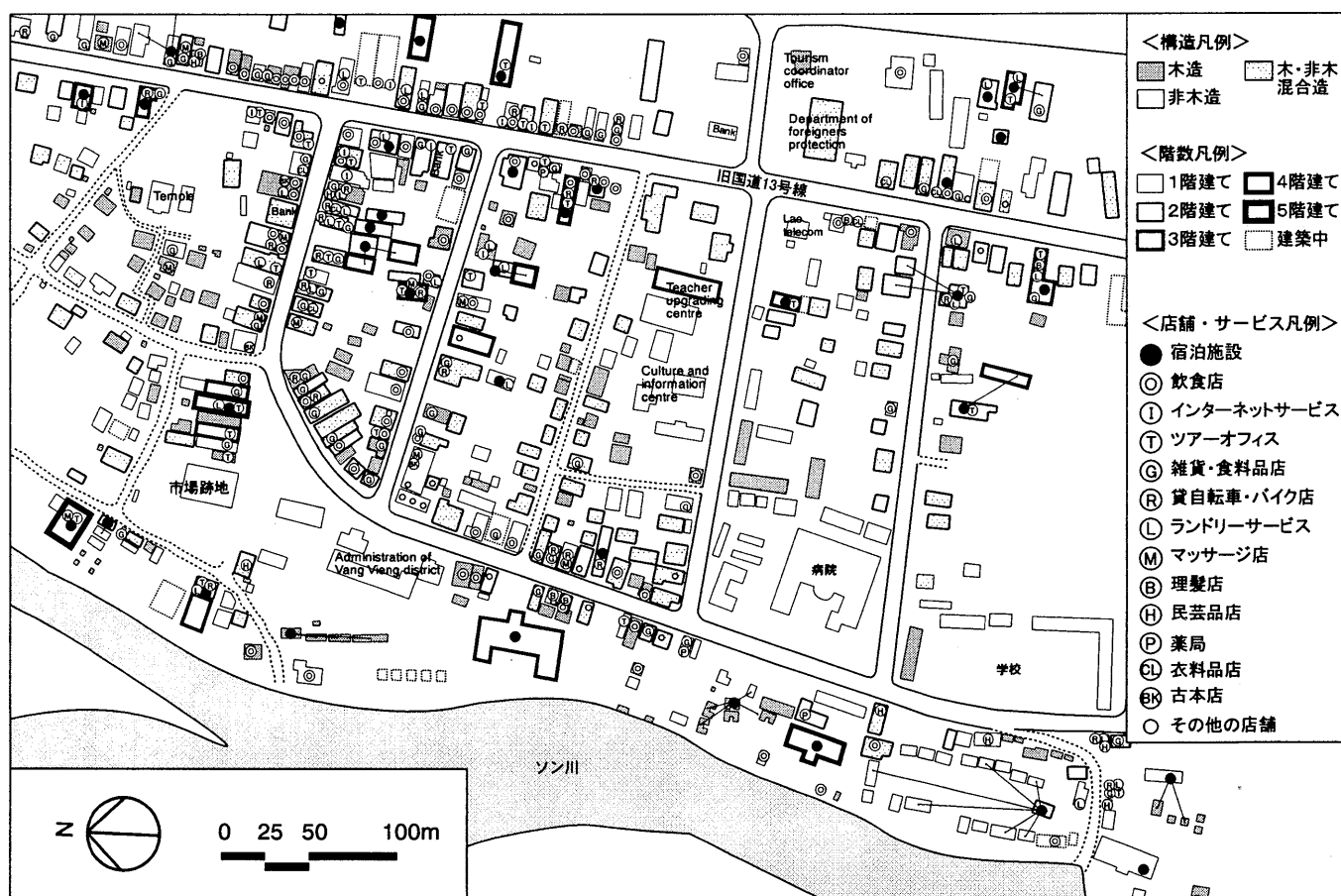


図1 ヴァンヴィエンの建築物と店舗・サービスの分布 2006年10月

係があるのだろうか。業種ごとに、その店舗が入っている建物の階数・構造別の棟数をみたものが表1である。ここから、現地の店舗・サービスは、様々なタイプの建築に分散していることがわかる。業種と建築類型との目立った相関はみられない。現地では相対的に高層である3階建て以上の建物に関しては、その多くが宿泊施設の客室棟として利用されていることが指摘できるが、一方では低層・小規模な建築を用いた宿泊施設も多数みられる。バックパッカーを顧客とする商業活動が特定のタイプの建築を必要としないことがわかる。こうした商業施設の多くは、地元民の住宅とその増築部分を利用して設けられた空間を利用して営業されており¹⁾、現地では既存の建物を利用した小規模な事業の開始が容易である、ということが示唆される。ヴァンヴィエンのバックパッカー・エリアでは、多くの小規模建築が建ち、そこに多数の小規模ビジネスが入り込むことで、エリア全体として訪問者の衣食住や旅行活動を支える機能を保持している。

こうした現地の空間はどのような変化を経て形成されてきたのか。4回の調査における建築物の内容の変遷をみると(表2)、建物棟数は、2002年6月の460棟から、2003年9月471棟、2005年12月514棟、2006年10月529棟と一貫して増えてきた。階数別にみると、2002年6月から2006年10月の間に増えた棟数が最も多かったのは1階建てであり、297棟から346棟へと49棟の増加となっている。この増加数は、2階建て以上の建物の増加数に比べて突出して多い。構造では、特に非木造が2002年6月の213棟から2006年10月の269棟へと大幅に伸びた。木造も142棟から155棟へと若干ながら増加している。混合造の棟数に大きな増減はみられなかった。

表1 業種別 店舗が入った建物の階数・構造別棟数 2006年10月(棟)

	1階 木 (149)	1階 非木 (92)	1階 混合 (5)	2階 木 (6)	2階 非木 (55)	2階 混合 (100)	3階 非木 (16)	4階 非木 (5)	5階 非木 (1)
宿泊施設	21	31	0	0	18	5	12	5	1
飲食店	22	25	0	1	8	14	1	0	0
雑貨・食料品店	6	19	0	1	8	14	2	0	0
ツアーオフィス	2	6	0	0	6	6	6	2	1
ランドリーサービス	6	5	0	0	5	5	2	1	0
貸自転車・バイク店	4	5	0	0	6	6	3	0	0
インターネットサービス	1	3	0	0	1	2	1	0	0
民芸品店	3	2	0	0	0	2	0	0	0
理髪店	1	2	0	0	0	1	1	0	0
マッサージ店	2	3	0	0	2	2	1	0	1
その他の店舗	1	12	1	0	4	11	1	0	0

(注) 1) 5件以上の業種を表示。2) 建築中の建物に入った店舗を除く。
3) 括弧内はエリア内に立地する建物の全棟数。

表2 階数・構造別 建物棟数の推移

	2002年6月 棟 (%)	2003年9月 棟 (%)	2005年12月 棟 (%)	2006年10月 棟 (%)
1階建て	297 (64.6)	306 (65.0)	337 (65.6)	346 (65.4)
2階建て	153 (33.3)	148 (31.4)	156 (30.4)	161 (30.4)
3階建て	9 (2.0)	14 (3.0)	16 (3.1)	16 (3.0)
4階建て	1 (0.2)	3 (0.6)	4 (0.8)	5 (0.9)
5階建て	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.2)	1 (0.2)
木造	142 (30.9)	142 (30.1)	146 (28.4)	155 (29.3)
非木造	213 (46.3)	227 (48.2)	264 (51.4)	269 (50.9)
混合造	105 (22.8)	102 (21.7)	104 (20.2)	105 (19.8)
計	460 (100)	471 (100)	514 (100)	529 (100)

表3 店舗・サービス数の推移 (店舗・施設数)

	2002年6月	2003年9月	2005年12月	2006年10月
飲食店	50	48	67	73
雑貨・食料品店	36	47	48	51
宿泊施設	35	36	33	36
ツアーオフィス	10	17	30	30
貸自転車・バイク店	11	10	23	25
ランドリーサービス	15	20	24	24
マッサージ店	2	4	5	11
インターネットサービス	5	4	9	9
民芸品店	4	6	9	7
衣料品店	1	1	2	6
理髪店	5	4	6	5
薬局	4	4	5	3

(注)4回の調査において1度でも5件以上を記録した業種を表示。

1階建て・非木造の小規模建築を中心とする多くの建物が新築され、全体としてエリアの建築物の密度は高まってきた。

店舗・サービス数の推移を観察すると、外国人旅行者を主な顧客とした商業活動の急速な拡大の様子がみてとれる(表3)。2002年6月から2006年10月の間に、飲食店は50件から73件、雑貨・食料品店は36件から51件、ツアーオフィスは10件から30件、貸自転車・バイク店は11件から25件、ランドリーサービスは15件から24件と、その数を大きく伸ばしている。宿泊施設は35件から36件と数の上ではほとんど変化がない¹⁸⁾が、4度の調査の間には若干の宿泊施設の閉業と、それとは別の宿泊施設の新規開業が確認され、その内容には変化がみられた。

建築物と商業施設の関係としては、宿泊施設の建物類型に若干の変容が観察された。宿泊施設に利用される建物棟数の合計は、2002年6月の70から2006年10月の91まで増えている。宿泊施設数には大きな変化がないことから、複数棟から構成される宿泊施設の増加がうかがえる。階数別にみると、1階建て、および3階建て以上の建物の増加が顕著である。2002年6月から2006年10月の間に、1階建ては35棟から52棟、3階建ては7棟から11棟、4階建ては1棟から5棟へと増加した。現地では、1階建ての小規模なバンガロータイプの客室棟を複数設置した宿泊施設、および現地では相対的に高層である3階建て以上の宿泊施設が普及しつつある。宿泊施設以外の業種については、先述のように、建物類型との間に目立った相関はみられず、この結果は4回の調査を通じて変化がなかった。

ヴァンヴィエンのバックパッカー・エリアは、建物が新たに建ち、旅行者向けの商業活動が増えることで拡大してきた。現地の空間は、地元民の住宅を初めとする小規模建築と、それらの建物を利用した旅行者向けの小規模ビジネスの組み合わせによって構成されている。バックパッカーは高級ホテルや豪華なレストランなどの施設を要求せず、むしろ民家等の簡素な建物を利用した食堂や宿泊施設を好む。彼らを主な顧客とする商業活動の多くは特定の種類の建築物を必要とせず、その意味において、建物とビジネスの関係はフレキシブルであるといえる。バックパッカー・エリアでは、特別な施設や設備を手に入れる資本力をもたない地元民が観光関連ビジネスを開始し、観光の拡大から経済的恩恵を得ることが比較的容易である。ヴァンヴィエンでは、観光の拡大以前から存続してきた既存の住宅を主とする小規模建築と小規模ビジネスの集積がバックパッカーを引きつけている。同時に、当地を訪れる旅行者がバックパッカーであるからこそ、こうした小規模ビジネスが存立しうる、といえよう。

3. ヴァンヴィエンの宿泊施設所有者

ある場所の空間の様態は、その土地に集まる人びとから形成される社会のあり方と密接に関係している。この章では現地の社会を構成する人びとの一類型である、宿泊施設所有者の特性を観察する。2003年9月、2005年12月、2006年10月の3回にわたり、宿泊施設の所有者に対して、年齢・職業・出身地などの個人属性、宿泊施設の内容、ヴァンヴィエンの観光地としての開発に関する意見、今後の事業予定などを聴き取り調査した。所有者からの回答が得られない場合は、経営者および所有者の親族などから所有者の立場での回答を得た。調査対象は、調査区域に立地する全ての宿泊施設のうち、所有者が長期不在で、所有者との面識が少ない従業員が宿を運営している事例など、インタビューが実施できなかった4件を除く37件の宿泊施設所有者34名である。同一人物が複数の宿を所有するケースを含むため、宿泊施設と所有者の数は一致していない。また、本章での宿泊施設数が前章における各調査時点での宿泊施設数を上回っているのは、インタビュー実施後に閉業が確認された若干の事例を分析対象に含めているためである。

宿泊施設所有者の属性、および宿泊施設の内容に関する回答を、その開業時期が古いものから順に並べたものが表4である。ここからまず宿泊施設の属性をみておく。宿泊施設1件当たりの平均客室数は15.9である。開業時期では、1989年が1件、その他は全て1990年代以降である。中でも、1990年代後半以降が31件、全体の83.8%に及び、全体として新しい宿泊施設が多いことがわかる。宿泊施設の運営については、所有者本人とその親族を中心に小人数で行われていることが特徴的である。所有者本人を除く、宿の運営に日常的に関わる人数は、回答が得られた33件のうち24件で「4人以下」であり、所有者とその親族が運営に関わる人数の過半を占めるケースが27件と全体のほぼ8割にのぼっている。

次に宿泊施設の所有者個人の属性を観察してみる。所有者の出身地は、回答が得られた33名中24名が地元ヴァンヴィエンであった。現地の宿泊業を担う人びとの典型として、ラオスの国際観光の解禁以前から現地に暮らしていた住民が、旅行者の増加に合わせて自宅を増築、あるいは客室棟を新築して宿泊施設を開業した、というパターンが読み取れる。宿泊施設を所有する以前の職業では、市場内の店舗での小売業、運送業、教職など、ヴァンヴィエンで地元民の需要にこたえる業種が主流である。そのほか、首都ヴィエンチャンで会社員として働いていたケース、海外で就労していたケースなどがみられる。企業経営など、大規模な資本をもつと想定される仕事に従事していた回答者は少ない。

宿泊施設の開業時期と所有者の属性、および宿泊施設の特徴の間には相関がみられ、それらの指標の分布から、現地の宿泊施設所有者は以下の3つに分類できる。①1996年以前に開業した施設の所有者は、ヴァンヴィエンで生まれたのち、外国での就労・留学を初めとして、外国人との交流が多いと思われる職業を経験した割合が高い。②1997年～2001年開業の宿泊施設所有者の多くは、ヴァンヴィエンで生まれ、市場での物品販売を初めとして、主に現地で地元民を対象にした職業に従事していた。③2002年以降開業の宿泊施設の所有者では、首都ヴィエンチャン出身、あるいは首都での就労経験をもつケース、比較的大規模な、あるいはバンガロータイプの宿泊施設を開業するケースが多いことが特徴的である。当地のバックパ

表4 ヴァンヴィエンの宿泊施設所有者の概要

部屋数	出生地	開業年	運営人数(うち親族)	以前の職業
12	ヴァンヴィエン	1989	3(3)	測量技術等の勉強のためモスクワへ留学
12	ヴァンヴィエン	2002		
25	ヴァンヴィエン	1992	4(2)	アメリカで働いていた
10	ヴァンヴィエン	1992	3(3)	ヴィエンチャンでホテルのレストラン経営
31	ヴァンヴィエン	1992	6(6)	建設業
24		1995		
6		1997		
19	ヴァンヴィエン	1994	3(3)	不明
28	ヴァンヴィエン	1996	9(4)	JICA の森林保護プロジェクトに従事
14	シェンクアン	1997	4(3)	シェンクアンの市場で衣料品を販売
24	ルアンパバン	1998	4(1)	運送業
12	ヴァンヴィエン	1998	3(3)	自動車部品販売
7	ヴァンヴィエン	1998	3(3)	市場で衣料品販売
12	ヴァンヴィエン	1998	2(2)	不明
5	ヴァンヴィエン	1998	4(2)	市場で雑貨屋経営(現在も継続)
20	ヴァンヴィエン	1999	3(3)	ヴィエンチャンでレストラン勤務
17	ヴァンヴィエン	1999	4(2)	市場で物品販売
13	不明	1999	2(2)	不明
26	ヴァンヴィエン	1999	4(1)	乗り合いトラックの運転手
39	ヴィエンチャン	1999	23(3)	ヴィエンチャンで会社経営
7	ヴァンヴィエン	1999	3(2)	オフィス勤務の後、氷屋を営業
20	ヴァンヴィエン	2000	4(1)	市場で雑貨販売
15	ヴァンヴィエン	2000	1(0)	無職
6	ヴァンヴィエン	2001	0(0)	市場で雑貨販売
10	ヴァンヴィエン	2001	2(2)	教師
6	ヴァンヴィエン	2001	5(5)	不明
10	ルアンパバン	2002	4(3)	1997 年まではバイク店経営、その後レストラン経営
不明	ヴィエンチャン	2002	19(0)	ヴィエンチャンのホテル従業員
6	ヴァンヴィエン	2002	0(0)	教師
9	ヴィエンチャン	2002	2(0)	ヴィエンチャンで旅行会社経営(継続中)
30	ヴァンヴィエン	2003	9(1)	建材店の経営(現在も経営中)
20	ヴァンヴィエン	2003	9(8)	同じ場所での店舗経営
18	ヴァンヴィエン	2003	5(3)	ヴィエンチャンでコンピュータ会社勤務
10	ヴィエンチャン	2004	6(6)	ヴィエンチャンで貿易会社勤務
6	ヴァンヴィエン	2005	1(1)	市場で家具販売。現在は運送業を兼業
21	ヴィエンチャン	2005	3(3)	ヴィエンチャンで教師と NGO 職員を兼業
31	ヴィエンチャン	2006	13(2)	ヴィエンチャンで NGO 職員

ッカー・エリアが、一部の地元民の宿泊施設開業によって発生し、その後さらに多くの地元民によって拡張され、近年では外部者の参入を受け入れる傾向を強めてきた、という変化の過程がみてとれる。

ヴァンヴィエンのバックパッカー・エリアの宿泊施設は、その大部分が現地に長年暮らしてきた人びとによって運営されており、近年では、地元民以外の人びとの参入が見られるようになった。小規模建築が集まることで形成されているヴァンヴィエンの空間では、大規模な資本をもった企業だけではなく、地元民、あるいは現地での事業開始を希望する個人など、資本金の低い人びとが小規模な観光関連ビジネスを開始しやすく、そのことが開業を望む多くの人びとを引きつけてきた。

次に、宿泊施設所有者たちが町の開発に対してもつ意見を観察する。ヴァンヴィエンの町が観光地として開発されていくことについての質問では、回答を得た 28 名のうち 20 名が、ヴァンヴィエンの経済振興・文化交流などの観点から、観光客のさらなる増加、あるいはそのための開発の必要性について述べている。「多くの人々が来て、建物が増え、道路が良くなれば、みなが仕事をもてるようになる。ヴァンヴィエンがもっと開発されることを希望する」、「旅行者が訪れて、ヴァンヴィエンのビジネスが成功して、人びとがお金を儲けられると良いと思う」などの意見が典型である。観光客誘致のために具体的に必要なものとしては、舗装道路、電気などの基本的なインフラから、観光案内所、観光案内看板、公衆トイレなど、観光客のための施設などの意見があった。回答者の多くは、観光の拡大を、経済振興とそれにとまなう地元民の暮らしの改善をもたらすものとして肯定的に捉えている。ただし、そうした開発を進める上で重要なこととして、ヴァンヴィエンの「自然」と「静けさ」の保全を指

摘する回答者が 13 名あったことに注意しておく必要がある。特に開業年が比較的新しい宿泊施設の所有者において「自然」と「静けさ」の保全を主張する者の割合が高く、2002 年以降開業の 11 名のうち 8 名からそうした回答が得られた。このことは、新しい宿泊施設の所有者にはヴァンヴィエン以外の出身者が多く、さらにそれらの人びとの大半が、当地の自然景観の美しさ、静かな町の雰囲気等に魅力を感じて現地へ移住してきたことを反映している。

自身のビジネスに関する今後の計画について尋ねたところ、「現在、川沿いにバンガローを建てている」、「現在新館を建築中。3 階建ての予定だが、資金が貯まれば 4 階建てにする」、「農園を造成し、バンガローの並ぶ宿泊施設を開く。ツアーオフィス、レストランも始めたい」など、建物の新築・増改築、新規事業開始などの具体的計画をもつ回答者、および具体的計画をもつには至っていないが、将来の施設拡張・新規開業を展望する回答者が各 6 名ずつみられた。その他、サービスの充実、客室内装の改善など、施設の物理的拡張や新規事業の開始をとまなわぬ計画をもつ回答者が 5 名であった。

現地の観光関連産業の代表的な存在である宿泊施設の所有者は、観光開発による地域の経済振興を期待し、自身のビジネス拡大を積極的に進めようとする傾向をもっている。このことは、観光地としての歴史が短いこと、未利用地が多いことなどに関連して、ヴァンヴィエンにおいては、観光のグローバルな拡大のもとで、多くの人びとが自身の手によってビジネスを開始し、それを拡大していく余地が大きいということを示唆している。

ヴァンヴィエンの宿泊施設所有者は、全体として、以前から現地に住んでいた人びとが多く、1990 年代後半以降に宿泊施設を開業したこと、経営は親族を中心に小規模なものであること、「静けさ」や「自然」を守りながら、町の開発・経済振興を歓迎し、自らのビジネスの拡大を展望していること、などの特徴をもつことがわかった。ヴァンヴィエンのバックパッカー・エリアでは、大きな企業ではなく、地元民を中心とした個人による小規模な観光関連ビジネスが集積している。小規模な建築が集まったバックパッカー・エリアでは、大規模な資本をもたない人びとも観光関連のビジネスへの参入が比較的容易である。近年における、外部からの人びとによる宿泊施設の開業の増加傾向は、このことを反映していると思われる。

4. ヴァンヴィエンのバックパッカー

続いて、ヴァンヴィエンの社会を構成するもう一つの主要な集団として、現地を訪れた外国人バックパッカーの特性を観察する。2003 年 9 月と 2005 年 12 月の 2 回、現地において、外国人バックパッカー 30 名にインタビュー調査を実施した。調査対象者の国籍の選定はヴァンヴィエンを訪れている外国人旅行者全体における構成比を考慮して行われるべきであるが、旅行者の国籍の詳細に関する統計を得ることができなかったため、ここでは 2003 年 9 月に、複数の宿泊施設において宿泊者名簿を閲覧し、過去半年間の宿泊客の大半を占めていた欧米諸国からの旅行者をインタビュー対象の中心としている。質問項目は、国籍・年齢・職業などの個人属性、期間・行程、過去に現地を訪れた回数などの旅行内容の詳細、および観光地としてのヴァンヴィエンの印象等である。

表 5 は、調査対象となった外国人バックパッカーの個人属性、旅行の内容に関する回答を、旅行期間が短いものから順に並べて表示

したものである。帰国日が未定で、旅行期間が不明の場合は、自国を出発してから調査時点までに経過した期間を採用した。

まず、回答者 30 名の個人属性を概観する。出身国は、日本が 10 名、イギリス 7 名、アメリカ 3 名、イスラエル、イタリア、オランダが各 2 名、カナダ、ドイツ、ベルギー、南アフリカが各 1 名である。年齢では、20 歳代が 18 名、30 歳代が 9 名、40 歳代が 2 名、50 歳代が 1 名、平均すると 29.4 歳と、全体的に若年層が多い。性別では、男性 18 名、女性 12 名となっている。就業状況では、無職（学生を除く）が 16 名と半数を超え、突出して多い。次いでコンピュータ関連会社の社員、銀行員などの正規雇用者が 8 名、そのほか学生が 4 名、自由業 1 名、自営業 1 名となっている。

彼らの旅行期間は総じて長く、平均 220 日に及ぶ。最も短い旅行は 17 日間、最も長いものは 4 年間である。旅行期間 1 ヶ月未満が 6 名、1～3 ヶ月未満が 7 名、3 ヶ月～半年未満が 5 名、半年以上が 12 名であり、3 ヶ月以上の旅行者が過半を占める。こうした旅行期間の長さは、先に述べた、定職をもたない旅行者の多さに反映されていると思われる。ラオスへは欧米諸国や日本からの航空機の直行便が就航していないこと、ヴァンヴィエンへのアクセスが首都から 3～4 時間を要する陸路交通に限られていることなどから、1 週間程度の短期間の旅行者が現地を訪れるケースは少ないものと推察される。旅行出発前に、訪問地や日程をどの程度厳密に計画していたかに関する回答を、①「全ての訪問地と日程」を計画、②「訪問国とその中のいくつかの訪問地」を計画、③「訪問国のみ」を計画、④「出発後の最初の訪問地のみ」を計画、の 4 段階に分類してみると、「全ての訪問地と日程」を計画していた回答者は 5 名にとどまり、残りの 25 名は計画に柔軟性をもたせて旅行をしている。特に、「訪問国のみ」、「出発後、最初の訪問地のみ」に当てはまる、具体的な旅程をほとんど計画せずに出発した者が全体の 6 割（18 名）に及ぶ。旅行が長期であるほど、日程の制約が少ないうえに、旅の途中での新たな旅行情報の入手、不測の事態への遭遇などによって旅程を変更する可能性が高いため、出発までに行程を厳密に計画する必要性が低くなると考えられる。調査時点以前にヴァンヴィエンを訪れた回数は、30 名中 25 名が「0 回」と回答した。ヴァンヴィエンでの滞在日数は平均 5.3 日間である。1 週間を超えて滞在する者も 6 名みられる。ヴァンヴィエンには、旅行期間が非常に長く、それに関連して離職、あるいは長期休暇を取得するなどして旅に出発したバックパッカーが多い。

現地の観光開発に関わることがらとして、ヴァンヴィエンの町の気に入った点は何か、という質問をしたところ、その回答として、「自然景観」（7 名）、「静かでのどかな雰囲気」（6 名）、「アウトドア活動の場の多さ」（6 名）、「地元民の人柄」（4 名）などの意見が多くみられた。具体的には、「地元の人びとがいつも笑っていて親切なところ。すてきな川、リラックスできるところ」、「静かで、涼しくて、楽しみがたくさんある点」、「景色が良く、リラックスできるところ」、「自然がすばらしい。景色が良い。アクティビティがたくさんある。地元の人びともみな良い人」、「ヴァンヴィエンにはまだ、昔ながらの人びとのやさしさや自然の美しさが残っている」などの回答がみられた。これとは逆に、現在のヴァンヴィエンについて不満な点を質問したところ、「観光関連施設の多さ」（6 名）、「文化が西洋化されている点」（6 名）、「旅行者の多さ」（5 名）などに言及

表5 ヴァンヴィエンのバックパッカー

国籍	性別	年齢	帰国後の定職	旅行期間	出発前における行程の計画	訪問回数
日本	男	37	カメラマン	17 日	予定は立てている。バンコクとヴァンヴィエンだけを訪れる。	多数
日本	男	23	無職	20 日	カンボジアのアンコールワットとバンコクを訪れる、ということとを予定。	0 回
イスラエル	男	27	会社員	3 週間	ほとんどの予定を立ててきた。イスラエルからタイに入り、ラオスを回ってタイからイスラエルに戻る	0 回
アメリカ	男	34	教師	3 週間	予定は立てている。ラオスだけを旅行する。	1 回
日本	男	23	大学生	24 日	短い旅行なので、予定を立ててきた。タイからラオス、南ベトナム、カンボジア、タイを回る。	0 回
日本	男	26	無職	1 ヶ月弱	決めてきた。ヴァンヴィエンだけを訪れる。バンコクの空港から、まっすぐラオスへやってきた。	2 回
イスラエル	男	30	会社員	1 ヶ月	大体決めてきた。3 ヶ月間の旅行をしている知人と合流する。	0 回
イギリス	男	20	学生	1 ヶ月	バンコク行きのチケットだけを買ってきた。次に行く場所は、その時その場所を考える。	0 回
イタリア	男	37	銀行員	5 週間	どの国で何日くらい過ごすのか、どの国からの国へ行くのかは、大体決めていた。	0 回
日本	女	25	無職	40 日弱	ラオスとシェムリアップ（カンボジア）、チェンマイ（タイ）を訪れることだけ決めていた。	0 回
日本	男	24	大学院生	44 日	立ててきた。ラオスでダムを視察する予定があったので。予定どおり進んでいる。	0 回
イギリス	男	32	自営業	2 ヶ月	ある程度立てていた。だが、まだ始まったばかりなので、予定どおりに行くかはわからない。	0 回
日本	男	24	無職	2 ヶ月半	予定は立てていない。	1 回
日本	女	22	無職	3 ヶ月	まずはとりあえずバンコクへ行きたかった。あのことは考えていなかった。	0 回
カナダ	女	23	教師	4 ヶ月	大まかに決めてきた。バンコクからラオスを巡って、マレー半島を南下、シンガポールから帰国	0 回
オランダ	女	23	無職	4 ヶ月	しっかりと計画していた。	0 回
南アフリカ	男	26	無職	5 ヶ月	予定は立てていなかった。	0 回
イギリス	男	40	ソーシャルワーカー	5 ヶ月	いくつかの場所については、細かい予定を立てていた。それ以外の場所の予定は柔軟なままにしている。	0 回
ベルギー	女	28	無職	半年～1 年	しっかりと計画していた。東欧、ロシアを抜けて、アジアに入る。予定どおりに進んでいる。	0 回
イギリス	女	31	店員	半年	大体の予定を立てていた。	0 回
オランダ	女	26	大学院生	9 ヶ月	予定はほんの少しだけ立てていた。	0 回
イギリス	女	23	無職	9 ヶ月以上	ニュージーランドまで旅行して、現地で働く。仕事がつまれば資金を貯めて旅を続ける。みつからなければ帰国する。	0 回
イギリス	女	29	団体職員	1 年	ソロモンで半年暮らす以外は予定なし。	0 回
イギリス	女	28	無職	1 年	オーストラリア、ニュージーランド、フィジーに行くことは決めてきた。	0 回
ドイツ	女	33	無職	1 年	どの国を訪れるかは決めてきた。	0 回
アメリカ	女	38	無職	1 年	計画はあまり立てていない。その場所で、次の行き先を考える。	0 回
日本	男	23	無職	1 年以上	特に決めていない。イタリアのトリノを目指すというだけ。	0 回
日本	男	50	無職	1 年半	全く決めていない。	多数
アメリカ	男	31	無職	2 年半	全く決めていない。	0 回
イタリア	男	40	無職	4 年	立てていない。その場で決める。	0 回

するバックパッカーが多かった。具体的な回答では、「旅行者の多い場所は好きではない。だからヴァンヴィエンも嫌い」、「ツーリストが多すぎる」、「町がツーリスティック過ぎる。人、車、レストラン、バーが多すぎる」、「レストランやホテルが多すぎる」、「ここにあるのはピザやパンケーキばかり。ラオス料理屋が欲しい」、「ここは文化が西洋と同じ感じがする。西洋の町のように」、「ここはラオスではない」、「西洋のいろいろなものが混ざっている」などがある。

ヴァンヴィエンのバックパッカーの特徴として、柔軟な旅程のもと、長期旅行の途中で初めて現地を訪れ、数日間にわたって滞在すること、「ラオス」の「農村」らしさ、観光地としての「未開性」に価値を見出していること、などがわかった。小さな農村であるにもかかわらず、バックパッカーがヴァンヴィエンに数日間にわたって滞在する要因として、低廉な宿泊施設や食堂がそろっていること、自然景観、アウトドア活動の場などの観光資源が多いことに加え、人びとの素朴な人柄、町の静けさ、現地独自の文化など、ラオスの農村が有していた特徴が残っていることがあげられる。このラオス

の農村の特徴を形成する要素として、観光の拡大以前から現地にある既存の小規模建築、あるいは地元の人びとによる簡素な商業空間が重要な役割を果たしていると考えられる。小規模建築と小規模商業活動の集積した空間がバックパッカーを呼び寄せてきた。同時に、長期旅行のバックパッカーは何日間にもわたり現地に滞在し、低料金の宿泊施設や簡易な食堂、売店などを積極的に利用することで、地元民による小規模・簡易な商業活動を成立させている。

5. 結論

ここまでヴァンヴィエンのバックパッカー・エリアの建物と商業活動、宿泊施設所有者、外国人バックパッカーの特性を観察してきた。その結果として、現地では、①小規模建築が集積することでエリアの物理的空間を形成している、②主に地元民による小規模ビジネスがバックパッカーの求める機能を提供している、③特に長期旅行のバックパッカーが、「ラオスの農村」の特徴が残っていることを現地の魅力と感じて訪問してきた、などのことが明らかになった。

これらの分析結果は何を含意しているのか。本研究の結論として、バンコク・カオサンエリアの調査で得られた知見を踏まえつつ、農村・新興バックパッカー・エリアの空間特性、および観光のグローバルな拡大のもとでの農村開発における今後の課題について考察するとき、以下の2点が指摘される。

第一に、ヴァンヴィエン、カオサンエリアの双方において観察され、バックパッカー・エリアに共通すると考えられる特徴として、小規模建築と小規模ビジネスがエリアの重要な構成要素となることが指摘される。バックパッカーは、低廉な料金の宿泊施設や、地元民が利用する簡易な食堂などを好んで使う。彼らを顧客とする商業活動は、特定のタイプの建築物を必要としない。バックパッカー・エリアでは、建物と商業活動の関係が柔軟であるといえる。この柔軟さが、地元民を初めとする、資本力の低い人びとが観光産業へ自主的に参入するためのチャンスを広げる一つの要因となっている。今後の途上国農村では、観光の拡大に合わせて、より単価の高い観光客を呼び込むための、より大きな資本を必要とする大規模施設の開発が進むであろう。しかし観光開発のあり方として、そうした「大規模化・高級化」だけではなく、バックパッカー・エリアに観察されるような、経済力の弱い地元民が主体的に開始できる小規模ビジネスを成立させ、それを可能にする空間としての既存の小規模建築を保全する方向性をもっと検討されてよい。

第二に、ふたつのバックパッカー・エリアの相違点として、それぞれの空間を構成する要素の「多様性」について言及しておく必要がある。カオサンエリアでは、様々な種類の建物・商業活動・人びとが集まり、そうした多様な要素を受け入れる空間の柔軟性こそが現地の魅力となっていた。これに対し、ヴァンヴィエンの空間は、観光の拡大以前の農村時代から続く、比較的均質な建物や人びとから構成され、そのことが旅行者にとっての魅力を生み出している。ヴァンヴィエンを訪れたバックパッカーが重視していたのは、ラオス農村の特徴として、当地における観光振興開始以前の土着的な特徴がどの程度残っているか、であった。現在では新しく出現する建物は総じて小規模なものであり、現地の空間特性を大幅に改編するような変容はみられない。しかし今後も様々な観光開発のもとで空間変容が進むとすれば、その際に、旅行者が魅力として感じていた

現地の空間の特性が損なわれる可能性がある。その意味で、均質な空間から作られる魅力は変化に弱く、損なわれやすい。特別な観光資源をもたない場所においては、近代的な観光施設やインフラが開発された後に、何がその土地の魅力となるのか、という問題が浮上してることがありえる。今後、農村の観光開発を進めるにあたっては、均質な空間の魅力をどう考えるのか、あるいは、農村における観光開発という行為がどのような意味をもつのか、をさらに検討していく必要がある。

注および参考文献

- 例えば、de Kadt, E.: *Tourism - Passport to development?*: Perspectives on the Social and Cultural Effects on Tourism in Developing Countries, Oxford University Press, 1979 など。
- Hampton, M. P.: *Backpacker Tourism and Economic Development*, *Annals of Tourism Research*, Vol.25(3), pp.639-660, 1998.7; 同: *Entry Points for Local Tourism in Developing Countries: Evidence from Yogyakarta, Indonesia*, *Geografiska Annaler*, Vol.85B, pp.85-101, 2003.6; Scheyvens, R.: *Backpacker Tourism and Third World Development*, *Annals of Tourism Research*, Vol.29(1), pp.144-164, 2002.1
- Sørensen, A.: *Backpacker Ethnography*, *Annals of Tourism Research*, Vol.30(4), pp.847-867, 2003.10; Richards, G., Wilson, J.: *The Global Nomad: Backpacker Travel in Theory and Practice*, Channel View Publications, 2004 など。
- 前掲 Hampton, 1998; 同, 2003; 前掲 Scheyvens, 2002
- 代表的なものとして、Loker-Murphy, L., Pearce, P. L.: *Young Budget Travelers: Backpacking in Australia*, *Annals of Tourism Research*, Vol. 22(4), pp.819-843, 1995.10; 前掲 Richards, G., Wilson, J., 2004 など。
- 前掲 Hampton, 前掲 Scheyvens; Spreitzhofer, G.: *Backpacking Tourism in South-East Asia*, *Annals of Tourism Research*, Vol. 25(4), pp.979-983, 1998.10
- 森聖太, 平山洋介: バックパッカー・プレイスの空間構成とその変容: バンコク, カオサンエリアのケーススタディ, *日本建築学会計画系論文集*, No.586, pp.127-133, 2004.12
- Pryer, M.: *The Traveller as a Destination Pioneer*, *Progress in Tourism and Hospitality Research*, Vol.3(3), pp.225-237, 1997.9. など。
- Asian Development Bank: *Vang Vieng Town Report: Final Edition Incorporating the Comments of the Asian Development Bank and the Government of Lao PDR*, Asian Development Bank, 2002
- こうしたラオスの国際観光の沿革については、Yamauchi, S., Lee, D.: *Tourism development in the Lao People's Democratic Republic*, 1999, www.un.org/esa/desa/papers/1999/esa99dp9.pdf (2007/3/10 アクセス)を参照。
- 前掲 Asian Development Bank を参照。
- 郡集計、および郡への聴き取りによる。ラオスにおける外国人の旅行は1989年10月に解禁され、外国人入国者数は1990年の1万4000人から、1997年の40万4000人と急速に伸びた。2004年には89万5000人の外国人が訪れている。同国への観光客数については *National Tourism Authority of Lao PDR: 2001 Statistical Report on Tourism in Laos*, 2002, および ASEAN 統計を参照。
- 前掲 National Tourism Authority of Lao PDR, およびラオス政府観光局への聴き取りによる。
- 建物の低層部に煉瓦やコンクリート、上層部に木質材料を用いたもの。1階の壁に煉瓦、2階の壁に木材を用いた2階建ての建築物が多い。
- 高床式の建物の中で、高床部分にコンクリート製の柱を用いて十分な階高を設けるなど、将来的に煉瓦などで壁を建造することが想定されていることが明らかな建物は2階建てとしてカウントした。こうしたラオスの農山村における住宅建築形態の変化に関しては、河本順子, シツテイワン ソムチット, 吉田勝行: ラオス中部における農山村住宅の形態変遷, *日本建築学会計画系論文集*, No. 577, pp.89-96, 2004.3 を参照。
- 例えば、スナック菓子、清涼飲料水、日焼け止め薬など、外国人旅行者が多く利用すると推察される品物を主に扱う店舗を対象とした。
- このことは、図1からわかるとおり、特に店舗密度の高い一帯で、道路に面した建物が奥行き方向に長い矩形の平面をもつことから確認できる。その多くは、道路側および後背部に店舗スペースや厨房等を増築した住宅である。
- 近年、新しい宿泊施設の開発が調査対象区域の外側で増える傾向がある。

(2006年12月10日原稿受理, 2007年5月25日採用決定)